

「派遣を終えて感じたこと」



私は、被災者対策部隊として震災直後に宮城県、4月中旬から下旬まで岩手県へそれぞれ出動しました。

1回目の宮城県には、震災直後の3月14日に出動し、水不足、食料不足で寒い中、入浴することもなく5日間活動してきました。私が所属する部隊の派遣先は、多くの被災者を出した山元町や亘理町を管轄する亘理警察署でした。福島県との県境に位置し、

放射能の危険性も懸念される地域でした。

派遣前に「君の任務は避難所での心のケアが担当だ」と指示を受けていたのですが、被災地はまだそこまでの段階ではなく、警察署には家族を探すため行方不明届けを出す人、家財道具を津波に流されて遺失届を出す人などが多数訪れる状態で、私達派遣部隊も各種届出の受理に忙殺され、結局一度も避難所に行くことはありませんでした。

私が、この仕事の中で辛かったのは行方不明者の受理でした。行方不明者の最悪の状況を想定し、家族から指の先から足の先まで細かく身体特徴を聞いていくのですが、ついさっきまで付添いの人と笑いながら話していた人でさえ、話しを聞いていくにつれ泣き出ししてしまう人がほとんどでした。私が細かく質問したため、行方不明者の健在なころの姿や思い出が脳裏に浮かんだのかもしれませんが。

このような家族の姿を見て、私も何度か貰い泣きしそうになりました。しかし私は警察官です。警察を頼りに来た人の前で、しかも制服を着ている以上は泣いてはいけないと思い、ぎりぎりのところで目に涙をため、流さないようにこらえました。また、各種届出の受理と並行して行方不明者の捜索が懸命に行われていました。捜索が進むにつれて発見される遺体の数も多くなり、発見報告の無線も絶えることなく、その都度、署員は休みなく現場と警察署を往復して遺体を搬送していました。

このような中で所轄警察署の女性警察官と話す機会があり、家族の安否について聞いたところ、その女性警察官は「私の母がどうなっているか分からない。本当はすぐにでも探しに行きたいけど、この仕事についている以上は、母を信じて、生きていること祈ってるしかないね」と話ししてくれました。休みなく気丈に働いている所轄署員も、多くの身内や友人を亡くしているのが現実だったのです。警察署を訪れる人同様、所轄署員も被災者だったのです。そして、辛い状況でも決して下を向かず、前向きに頑張っている所轄警察署員の姿を見て少しでも力になりたい、私がやれることを一生懸命やりたいと強く感じたのを覚えています。

宮城県への出動を終えた約1か月後、今度は岩手県に出動することになりました。派遣先は、テレビなどで何度も繰り返し放送されるほど大きな被害を受けた大船渡地区の陸前高田市です。震災から1か月が経過していることもあり、私は、大分復興が進んでいるだろうと思っていましたが、街はまだがれきの山でした。

生活環境としては、仮設住宅が建ち始めていましたが、被災した世帯数と比べると全くと言っていいほど足りない状態で、被災者は1か月以上も不便な共同生活を強いられていたのです。避難所を巡回して被災者の相談活動にあたったところ、「プライバシーもほとんどなく気が休まることはない」「早く仮設住宅に入りたい」と話す被災者がほとんどでした。しかし、そんな中で70歳位の老女は「小さい子供がいる家庭や、病気の人とかは抽選じゃなく優先的に仮設住宅に入るべきだ。私みたいな健康なばあちゃんは後でもいいんだ」と私に話してくれました。本当は、すぐに仮設住宅に入りたいのに、こんな状況の中でも他人を思いやることができるこの方に私は感動しました。また、どこの避難所を巡回しても、「わざわざ遠いところからきてくださってありがとうございます」や「この震災で辛いけど、全国の人から助けてもらっているから今こうして生きていることができる」と感謝され、被災者のケアにあたるはずの私が、逆に被災者に励まされているような状態でした。

陸前高田市では、被災者の心のケアの他に小学生の登下校の引率も行いました。小学生は、がれきの山の脇や海のすぐ脇の道を歩いてそれぞれの家や避難所に帰ります。余震が続いている中、いつまた津波が来るか分からない状況下で、子供達だけががれきの山の脇を歩くのは本当に危険なことです。そのため、下校時間になると派遣部隊は各学校へ向かい、学校の先生達と一緒にそれぞれの下校グループに混じり付添いをしました。

一緒に被災地を巡回していた岩手県警の担当官から、「もし下校中に地震が発生したら、警笛を吹いて急いで高台に走ってください。岩手には『津波てんでんこ』という言葉があって、地震のときには、誰かと一緒に逃げるだとか、誰かを助けようとするとう命を落とすことになる。自分の命は自分で守ってください。」と言われたことは忘れられません。

このように、私は被災地に2回出動させていただきましたが、どちらの出動も本当に貴重な体験であり、今後の私の警察人生の大きな糧になると思います。数多くの尊い命を奪ったこの震災ですが、警察官の力強さ、被災しながらも前向きに生きる被災者の姿に、自分自身がとても励まされたような気がします。最後に、この震災で殉職した警察官が少なからずいます。彼らが、「住民を守る」ために殉職したことを私達は決して忘れません。彼らの死に報いるためにも、私も1日1日を大切に、住民を守るという仕事に誇りを持って邁進していきたいと思ひます。

